

第2編SLA

～ 2次試験の合格答案とは

——本質を外さなければ大丈夫～

(1) 講座の特徴

各クラス5名までの少人数ゼミ形式とすることで講師と受講生が1対個の関係になり、受講生は講師と密に相談しながら学習を進めることができる。講師は受講生の理解度を見ながら受講生がどうすれば2次試験に合格できるのか親身になってアドバイスする。本コースである合格ゼミナールでは2次試験の過去問を使用し、答案作成、設問解説、答案採点、個別講評&ディスカッションが1日で完結するカリキュラムになっている。受講生が解いてすぐ採点が行われるため、事例の対応方法を忘れてしまわないうちにフィードバックを受けることができ、学習効果も高い。

(2) 講座の概要

2次試験合格ゼミナールは1月～8月まで開校される。最初の4講義でインプット学習が行われ、そこから1講義で過去問1事例を使ったアウトプット学習が進められる。コースは土曜午前、土曜午後、日曜午前、日曜午後、月火夜間、水木夜間の計6コースで行われ、遠方の受講生はスカイプで講義に参加したり、通信講座を受講することもできる。

(3) 講座の合格実績

2015年に第1期生3名中3名合格。2016年は9名中4名合格。2次試験合格率業界No1を目指している。

関係者インタビュー

(1) 代表者インタビュー



株式会社SLAの代表講師、倉前誠二郎さん

① 講座を始めたきっかけ

代表である倉前誠二郎さんは2011年に2次試験に合格、2012年に診断士登録。2013年に株式会社SLAを立ち上げ、2015年1月から第1期生となる受講生3名を受け入れた。前職の勤務先では社命でセミナー講師を多数務め、その際の苦労と身に付けた技能が難解な2次試験の講座運営に活かせると考えていた。

倉前さん自身、受験生時代は大手受験校の受講生だったが、講師と受講生の関係は1方向。答案返却に時間がかかることにも不満を感じていた。

講師と受講生が双方向でやりとりでき、答案添削もよりスピーディーに行えるような少人数の学校。倉前さんが理想と考えた学校は既存受験校ではなく、それを自ら実現しようと考え株式会社SLAを立ち上げた。

② 2次試験の本質

倉前さんは2次試験の採点サービスを行ったり、受講生の本試験での解答を分析し、合格答案に盛り込まれた共通の要素はそれほど多くないことに気が付いた。本質を外さなければ、枝葉の部分の表現が多少違って合格点に達する。そう確信した。合格領域に達していない受験生は本質をつか

めず、枝葉の部分や得点にならない記述でマスを埋めている。

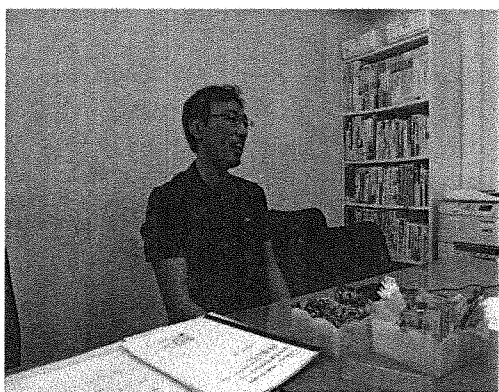
③本質をつかむためには

倉前さんによると1月から始まる合格ゼミナールの受講生は早ければ4、5月に、遅くても7月には開眼する。(＝合格領域に達する)

受講生は1人1人理解度や習得状況が異なるため、その人にあったアドバイスを講座の中で行い、さらに、要望に応じて個別に課題を提案し、最終的に本質がつかめるように導く。個別課題は任意であり、各受講生は自らの学習計画・環境にあわせて取り組むことができる。

(2)卒業生インタビュー

2015年度合格、金井義将さん



ソフトウェア販売会社勤務。2012年から4回の2次試験を経て、2015年に合格。仕事柄、中小企業とかかわることが多く、中小企業のことをよく知るために診断士を目指した。

① 金井さんの学習歴

金井さんは2012年は大手予備校A社、その翌年2013年は中堅のB社、2014年は2次試験前にB社の直前バックを利用したが合格に至らず、2015年にSLAにたどり着いた。

② SLAを選んだ理由

2014年度の2次試験の後、その年の再現答案をSLAに送り、フィードバック内容に納得感があ

ってSLAの受講を決めた。少人数のため、講師と相談しながら学習を進められるのも決め手となった。

③ 個別課題が良かった

金井さんは事例の与件文を読む際に重要な記述をサラッと読み飛ばしてしまう癖があり、講師である倉前さんに相談した。その時に提案されたのが与件文を段落ごとに要約する個別課題。この段落にはどういったことが書いてあるかとか、この行の記述はどういう意味かを書き出すことで、与件文を深く読む癖をつけることができた。また字の汚さを直すために漢字練習帳もプレゼントされ、意識して字を丁寧に書くようになった。

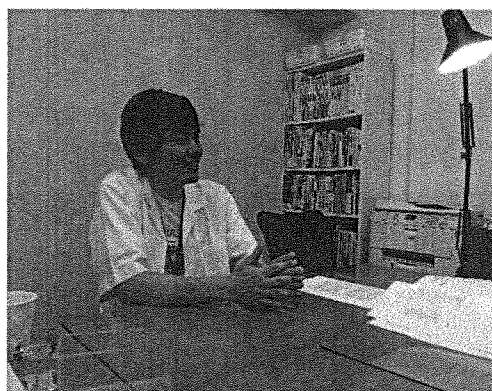
④ 開眼

金井さんはSLAを受講したことで2次試験において本質的なことを外さないということを学んだ。

合格年は直前に他社の模試を受け、上位には入れなかったが動じなかった。各受験校の模擬試験はその受験校のテクニックをうまく使えば得点が伸びるが、それだと本試験では対応できないことに気づき、SLAで学んだ方法で対応した。大切なのは模試の成績ではなく、本質を外さないこと。そう考えて自分を奮い立たせ本試験に突入した。結果、合格を勝ち取った。

(2)卒業生インタビュー

2016年度合格、岸上智広さん



半導体関連の生産管理システムを担当するSE。
2015年、2016年の2回の2次試験を経て合格。幅
広い知識を身につけるため、診断士を目指した。

① 岸上さんの学習歴

岸上さんは2015年に通信講座のみで1次試験に
合格したものの2次試験には歯が立たず、2016年
にSLAの門をたたいた。

② SLAを選んだ理由

大手のような大人数の所で受けると自分が質問
する時間も限られてしまうこともあり、少人数の
所を探していた。SLAなら少人数なので講師と
みっちり学習できると思った。また講師の人柄
も選んだ理由の一つだった。

③ 1日で完結するカリキュラムが良かった

SEのため、平日学習する時間がなかった岸上さ
ん。SLAでは1日の中で事例を解いて、フィ
ードバック、ディスカッションが完結するので密度
が濃く、毎回しっかり勉強でき、満足感を得られ
た。また過去問が学習の中心なので、時間がない
中でも寄り道せずに最短距離の学習ができた。

④ 開眼

自分なりに持っていた2次試験への対応方法を
SLA式に切り替え、合格年のゴールデンウィ
ーク明けにSLA式でいけると感じた。それ以前は
解答内容のあやまりを指摘されることが多かった
が、開眼した後は解答の構成について意見される
ことが増え、そのことで自分の実力が上がったこ
とを実感した。

体験受講

① スピーディーなフィードバック

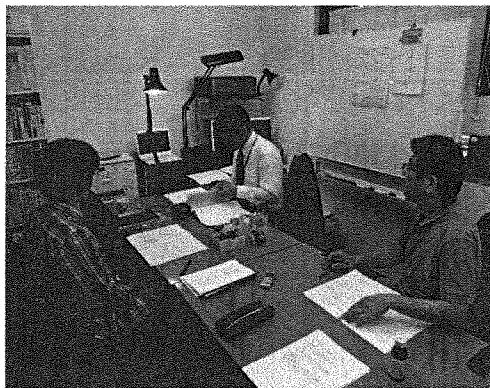
4名の受講生（通学2名、スカイプ2名）の参加
で授業が進められた。当日の題材は平成28年度の
事例3。80分間で事例を解いた後、休憩時間に倉
前さんがその場で答案にチェックを入れていく。
他の受験校だと事例を解いて、1週間後に答案返
却ということもあるが、SLAでは解いたその場
である。どのように考えて事例を解いたかが鮮明

に残っているため、その分学習効果も高そうだ。

② 設問解説

倉前さんの「題意は何ですか？」という問いか
けに受講生は「〇〇です」と答えていく。何気な
い問いかけではあるが、各設問について、何を解
答しなければいけないのかを受講生に意識させる
ための仕組みであろう。こうした双方向のやりと
りにより、自然と出題者の意図を外さない解答が
書けるようになっていくのだと感じた。

「第3問と第4問の違いは何か？」倉前さんか
ら不意に質問が飛んできた。受講生は少し戸惑っ
ていたがすぐに自分の考えを述べ始めた。その意
見が的確であったことを受けて、倉前さんは「あ
りがとうございます。勉強になりました」と反応。
受講生からドッと笑いが起きる。少人数というだ
けで活発に議論が交わされるとは限らない。倉前
さんも時には受講生が和めるような会話を挟みな
がら場の雰囲気に配慮し授業を進めていた。



体験受講風景

③ 答案講評と宿題

倉前さんが受講生の答案を読んでコメントをし
ていく。「ここではもう1論点入れられると良か
ったですね」。受講生も解答作成時にどう考えて
対応したか説明し、再度倉前さんがアドバイスし
ていく。答案の内容だけでなく、問題の対応方法

についても踏み込んで教えているのが印象的であった。2次試験は当日の対応が合否をわける試験である。こういったことにも気を配ってアドバイスする所は受講生が多い学校にはできない特徴であると感じた。

また受講生の当日の答案を見せて頂いて正直驚いた。皆、設問の題意を外していないわかりやすい解答だったからだ。聞くと事例を解いた後、翌週の授業までに他社の解答などを参考に、よりブラッシュアップした解答を作成する宿題があるそうだ。これが実力向上につながっているのだろう。

【取材後記（田中重治）】

「受講生には、予備校に通ったからとかではなく、自らの手で合格をつかみとる自信と喜びを感じて欲しい」と倉前さんはおっしゃっていた。自社のためではなく、受講生自身の本当の成長を考えて授業を行う。「黒子に徹する」この教育方針がSLAの特徴であり、魅力であると感じた。また、こうしたコンセプトあふれた受験校があることを知ったのも今回の取材の収穫であった。

【SLAよりー2020年10月現在の注記です】

当該記事は2017年11月現在の記事です。現在は、1クラスの定員を15名とさせて頂いております。このため、講座その場での個別アドバイスや講評などの実施状況は、取材当時の定員5名の時とは異なります。現在では、スピード感を持った添削や年々充実に努める教材や講座内容などにより、受講生の数が増えてもご提供するコンテンツの質を維持・向上できるよう、レベルアップ、ノウハウ蓄積を行い、一人でも多くの受講生に合格して頂けるよう努めております。